metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by
provided by Kwansei Gakuin Univer

新任教員として学んだこと

辻　内　祥　吾

1．はじめに

「教師」という職業はただ人に教えるという職業ではない。この言葉が１番感じとれた１年を私は過ごしました。私自身、ずっと教師という職業に憧れ、学生時代に教師になるためにといろいろな経験をしてきました。中学校や高校の課外指導員、塾講師のアルバイト、大学院での TA という学生実験の指導員は、教えるということを少しでも多く経験しておきたいという思いからでした。しかし、教師という職業は人に教えるだけではなく、自分が教える以上に自分自身が学ぶことがたくさんありました。また、自分の学ぶ姿勢が強ければ強いほど、子どもたちの学ぼうという姿勢が強く表れていると感じました。

私は、現在、京都市立向島中学校に勤務しています。すべてにおいて１年目で、希望と不安が入り混じっている中で仕事が始まりました。昨年の３月に、若さを前面に出していくというのが必要だと感じて心の準備をしていました。事前に学校法訪問したときに、向島中学校の学校長より３年生の担当であると告げられ、内心は不安の気持ちで胸がいっぱいでした。４月から勤務し、今に至るまで社会人として教師として多くのことを学び、成長することができました。それらの詳細について次節から述べたいと思います。

2．学校生活において

（1）学校について

私は、向島中学校に４月から勤務することになりました。どんな学校だろうかと春休みをワクワクしながら過ごしていたのもついこの間のように感じています。私は、向島中学校で食教育主任と学力向上プロジェクトを担当しました。食教育主任として、学校の全生徒、全職員の給食を管理していますが、栄養管理を行ったり、検査をしたりという仕事もありますが、給食を注文した生徒や教員の給食発注、要保護・準要保護の生徒の給食のチェックが主な仕事です。食教育担当をして、お金の管理に１番気を付けています。しかし、担任の先生との連絡がうまくいかなかったときや給食業者とのやりとりがスムーズにいかなかったときがあり、迷惑をかけてしまったこともありました。食教育の仕事だけではないですが、「ホウ・レン・ソウ」（報告・連絡・相談）がとても大切だと改めて学ぶことができました。「管理すること」を大学や課外指導員といった学生の間に経験したこともありましたが、社会人としてその責任の重さを感じ、自分の早期改善をする点を見つめ直す機会にもなりました。また、学力向上プロジェクト委員会に参加し、向島中学校の生徒の学力向上にどのような視点や項目が必要であるかなどを話し合い、毎回学ぶことがたくさんありました。その委員会では、ここ数年をかけて「言語活動の充実」をテーマに考え、この１年で多くの校内研究授業やワークショップがありました。私自身さまざまな研修に参加しましたが、レベルの高い研修が学校で行われているという印象をもちました。私は、授業構成の考え方、発問、グループ活動の設定、数年を見据えた教育などのトピックを日々考える習慣がありました。そして他の先生方の意見を聞くことで、自分の授業に取り込むさまざまな方法や見方を得ることができました。そのことが自分の授業を見直す術を学びました。

私は、どの職業についても必要な社会人としての「責任」や「素直さ」が学校現場においても大切だと感じています。教師として教科指導や部活動指導、生徒指導と子どもたちにいろんなことを教える立場にあるからこそ社会人としてしっかりした構えで接することが必須です。そのことを日々成長させていくべきだと思いますし、多くのことを自分の糧や経験として蓄積させていくことが重要だと学びました。

（2） 学年について

私は、３年生の副担任を担当し、あっという間に１年が過ぎたという印象です。そして、貴重な１年を経験することができました。私の学年分掌は、生徒会、代表委員会、ITC 教育、修学支援事業を担当しています。それぞれに学んだことがたくさんあります。その中で最も重要なことは「何をするにも段取り良くする」ことでした。また、分からないことを積極的に聞き、自分のものにしていくことも学びました。生徒会、代表委員会では、生徒が主体となって行事を行います。当たり前ですが、生徒に充実感や達成感を与えるためには、教師がしっかり計画をもって段取りしなければいけません。生

徒に段取りよく計画を与え、しっかり支援していくことで成功する経験をしました。１年間にはどのような行事があり、特に３年生関係のイベントがあるのか把握できずに行き当たりばったりになってしまい、他の先生方に大変迷惑をかけてしまったこともありました。さらに、自分の欠点でもある他人に意見を求めてしまう言葉遣いになってしまい、「こうしてほしい」という意見をしっかりと示せない場面が多々ありました。２・３ヶ月前の行事や企画に基づき、学校が運営されていくサイクルにはじめはなかなか慣れませんでした。そのとき、社会人としてまだまだ学生から抜け出せていない自分がいることに気づきました。そこから、学校の教員の一員として、まだ働きはじめて１年目だという初心に戻り、失敗を恐れず、どんなことにも挑戦、吸収して毎日を過ごしています。色んな考え方がある中で自分が取捨選択して歩んでいくことが重要で、周りに流されてばかりでもいけないと思います。たくさんの考え方、意見、経験談を聞くことは自分にとって多くの糧となっているのは確かです。

３年生の進路というプレッシャーに押しつぶされそうになった時期もありました。自分が生徒に何ができるのか、新任の僕に勤まるのか不安になりながら毎日を過ごした。また、自分のできる範囲を超えて行動すると大惨事になってしまい、迷惑をかけてしまいます。しかし、自分ができることとまだまだ未熟で抱えきれないことをしっかり見極め、未熟な部分をしっかり取り込んでいくという行動を取るようにしました。周りの状況を判断し、自分のできることをしていく、任さないと必要以上の時間がかかってしまうことは聞いて行動するというスタンスです。「百聞は一見に如かず」ということわざがありますが、学校の現場では、このことわざのように、聞いてみてやってみることで自分のできるキャパシティーが大きくなりました。

この３年生の学年集団に所属して、学年の先生から多くのことを学びました。ここに述べきれないさまざまな考え方、意見、経験談を教えていただき成長することができたと思います。この初心を忘れず、自分の教師生活に活かしていき、更なる成長を図りたいです。

３．教科指導について

（１）教科指導における教師の気持ちについて

私がこの１年で教科指導するに当たって学んだことは、自分が生徒に対して「熱意」をどれだけ注いだのかが重要であることです。「熱意」が大切であるのは、当たり前のことですが、そのことを自分の中で、しっかりと指導する基盤に置くことが１番重要だということです。

私は、４月から３年生２クラスと１年生２クラスの数学を担当しました。１年生はティームティーチングとして担当しました。私は、４月から「数学がおもしろい」と感じてほしいと思い、数学の授業をおもしろく感じてもらえると思った授業をしてきました。しかし、生徒からの反応は、「分からない」、「数学はやっぱり嫌」という言葉でした。そこには、何が自分に足らないのかと何回も自分の授業を振り返りました。なかなか自分の中で糸口が見えず、まずは同じ数学科の先生方の授業のマネをしてみて、自分に得られるものはないのかとかんがえました。また、授業の方法やどのように授業構成を考えているのかを聞いて授業も行ってみました。しかし、授業で生徒の反応に変化はありませんでした。そのとき、ある先生に授業がうまくいっていないことを相談したときにもらった言葉が、「生徒に対して『熱意』はどのくらいあったのか」でした。私は、その言葉に対して返す言葉が見つかりませんでした。つまり、自分が満足しているだけの授業や生徒がわかる授業になるまで準備ができていなかったことに気づきました。そこから授業の準備・工夫・内容説明の方法を考える姿勢に変化がありました。１つめに、「なぜ？」、「なんで？」ということを生徒に質問できるような授業の構成を考えるようになりました。数学では、論理的に物事を考える教科なので、「なぜ？」、「なんで？」と考えて理解することが生徒にとってすごく重要であるとわかりました。また、そのことを意識するようになってから、同じ教科の先生方や他の教科の先生方が、授業でどのような発問をしているのかすごく敏感になり、自分の授業に取り入れられないかを考えるようになりました。２つめに、生徒の「なぜ？」、「なんで？」に耳を傾けるようになりました。授業で、生徒から必ず「なぜ？」、「なんで？」の言葉や表情が出てくるので、授業の途中であっても説明することをこころがけて授業を進めました。３つめに、板書の工夫です。数学の授業で、板書が大切だと思って学生時代過ごしていなかったのもあり、板書は、この１年ですごく意識が変わり、授業が終わってから板書を見たときに生徒が「わかる」と感じる工夫をしました。板書が生徒のノートになるのは、当たり前ですが、その１時間でわかってほしかったこと、学んでほしかったことを視覚的にわかるようにと日々努力しました。１年で、この３点は、意識から変化し、自分が教員としての１年の糧になりました。この変化は、「生徒に対して『熱意』はどのくらいあったのか」の言葉からです。「熱意」をもって、生徒と接することで自分自身の視点に大きな影響があり、この気持ちを忘れず、熱意を土台に成長し続けていきたいです。

（２）授業から学んだこと

この１年「授業が勝負」という言葉を追い続けた１年だと言えます。教師では、生徒指導、部活指導、庶務などさまざまな種類の仕事があります。しかし、教師の仕事で、当たり前ですが「授業」が１番大切です。私の新任教員の１年目は、教師という「教えることのプロ」へ向かうための大きな１年を過ごすことができました。気持ちが大切であることは、前節で述べましたが、実際の授業から学んだことも多くありました。

実際の授業で、大きく分けて「時間」、「学び」、「切り替え」の３つの点で、多くのことを学ぶことができました。まず、「時間」です。１コマ50分という時間をどのようにして生徒たちに学んでほしいか考えて授業は行われます。ファーストステージ（４月～７月）のとき、私は、その50分がとても短く感じました。自分が予定していた授業内容ができず、あわてた授業になっていました。自分が生徒一人ひとりに集中してしまい、時間の意識ができていなかったこと、時間の区切る部分に徹底がなかったことに原因がありました。つまり、50分の「時間」を自分でしっかりコントロールできていなかったということです。指導教官の先生に、「チャイムで始まり、チャイムで終わる意識」をしっかりもちなさいと注意を受けた月もありました。８月からの授業では、タイムコントロールを意識して授業を行いました。50分の授業がしっかり意識でき、自分が教えたい授業内容をその時間内でできるようになってきました。まだまだ、時間を読んだ授業計画、時間配分、区切りができていませんが、「時間」が授業を左右する大きなポイントだと学びました。次に、「学び」です。授業で生徒に学んでもらうことは、当たり前です。しかし、その当たり前を実現するために、学びの環境、自分の発言、生徒主体という３つの要素が必要だと感じました。この３つの要素が１つでもかけてしまうと授業がただただ過ぎてしまっただけになってしまうのです。席が変わったという環境の変化で、生徒一人ひとりの授業への積極性が変化したのを目の当たりにしました。タイムリーに変化する生徒の学びの環境に対応した自分の発問、生徒の授業への関わり方を考えて授業をしないといけないと学び、今後の自分の目標として掲げて行きたいです。最後に、「切り替え」です。休憩時間と授業の切り替えをしっかりとさせることは、当然あります。それだけでなく、授業の中で教師が切り替えさせることの大切さを学びました。授業のはじめと終わりに行う礼、ノートを書く、話を聞くなどの行動の切り替えを教師が意識して生徒に声かけすることがすごく重要です。自分の授業の中に、切り替えを意識することがない授業をしてしまい、そのことが生徒の混乱を招いていることがありました。授業のテンポ、今は何をすべきかわかる授業を徹底することで、生徒の集中力が持続すると感じました。

「時間」、「学び」、「切り替え」の３つの要素で、授業の改善をしました。そこには、指導教官の先生のアドバイスがとても自分自身を成長させてくれました。授業に自信を持てない時期もありましたが、指導教官の先生の支えがあったおかげです。もっと成長し、授業を極めて、「わかる授業」を生徒たちに行う教えるプロになるために日々励んでいきたいです。

４．部活動指導について

（１）学校における部活動について

４月から女子バスケットボール部の指導を任されました。私は、学生時代の６年間、課外指導員という立場で、部活動に関わることがありました。その経験を活かして、顧問を頑張っていこうと思い、部活動指導に励んでいました。しかし、教育の一環としての部活動であるということを意識しないといけないことを学びました。なかなか課外指導員としての自分と顧問としての自分の切り替えができず、多くの人に迷惑をかけてしまいました。

バスケットボールというスポーツを通して、バスケットボールの技術だけでなく、人間性、集団行動、相手への思いやりなどの指導をするのが部活動指導だと感じました。その部分は、課外指導員で学ぶことのできなかったところです。部活動の中で、人間関係の問題、保護者への応対、相手校への心配りといったことなど、顧問であると同時に向島中学校の看板を背負っているという実感がありました。その分、顧問ができてよかった、今の環境でできたことがよかったと感謝の気持ちでいっぱいです。また、生徒を支えてくださる保護者の気持ちを考えるとてもいい機会になりました。生徒が練習や試合に元気良く参加できていることは、保護者の支えです。そのことも、私の指導の大きな支えになっています。これからも、一生懸命に部活動指導を通して、生徒と一緒になって成長していきたいです。

（２）女子バスケットボールを指導して

私は、「気持ちをもって行動する」と言い続けた１年でした。人の気持ちを考える、気持ちを入れて練習に取りかかるといった気持ちが大切ということを生徒に投げかけてきました。それは、技術や経験値が結果として見えるスポーツがバスケットボールです。しかし、気持ちが勝れば技術などは関係なくなるということを教えたいからです。その中でも、自分の思いに生徒をあてはめようとしてしまい、生徒の気持ちよりも自分の思いを優先してしまい上手くいかない日々がありました。１からもう一度部活動としてバスケットボールを教え直そうと努

力した１年でもありました。そこで学んだことを背景も含めて述べたいと思います。

私が顧問をしている女子バスケットボール部は、３年生８人、２年生３人、１年生８人が所属していました。はじめ、どのように指導していくのがベストなのか考えながら、選手と人間関係を築いていくのに必死でした。自分の思いがなかなか伝わらないこと、徹底して取り組んでいればと後悔したこと、選手が一生懸命なぜしないのかと悩んだことなど、毎日悩んでいました。３年生が引退するまでは、選手と一緒になって練習メニューを組み立て、一生懸命に練習に励んだのが今でも目に浮かびます。夏の大会が終わり、３年生が引退し、３年生から１・２年生に送ったメッセージの中で、「今のメンバーを大切にして欲しい」という言葉がありました。私は、４月から女子バスケットボール部の顧問として任せられ、それまでの部活動がどんな環境であったのか知らないままだったと気づきました。その言葉を聞いたとき、チームの意思統一、相手を思う気持ちが必要だと感じました。新チームになり、チームでの約束、礼儀、思いやりを徹底することを決め、夏休みの練習に励みました。技術指導をするという時間よりも生活面や人の話を聞く姿勢などの生徒指導の部分に多く時間を費やしました。また、女子バスケットボール部の「勉強会」もしました。チームメイトと過ごす時間や先輩・後輩の交流を深めて、チームの活力にしたいと思い取り入れました。この夏休みの取り組みの結果、チームという意識が少しずつ芽生え、そこからチームの雰囲気は良くなっていきました。練習の内容も以前に比べて一生懸命に取り組んでいる姿が見えます。自分が課外指導員をしているときに、選手を自分のレールにのせようと日々取り組んでいました。しかし、今自分の部活動指導をしていると、その以前の指導は良いものであったのか疑問に思うようになり、現在では、色んな先生や指導者の考えをヒントに選手（生徒）の個性を生かし、そのときのチームに合った指導法を考えて練習に取り組んでいます。この考え方に至るまでに、ある先生の一言がありました。「自分に自信をもって、太い幹をもって指導するといいよ」でした。この１年間を通して、部活動の指導においても自信をもって指導することが大切であることを学びましたまた、部活動指導ができる環境であることに感謝しないといけないとあわせて感じています。４月から自分の学生時代にやっていたバスケットボールを教えられることは、すごく有難いことだと思います。そして、女子バスケットボール部に所属している多くの生徒がいたからこそここまで部活動指導に励むことができています。生徒の保護者の方々にも、心から感謝しています。

私は、部活動指導で、「気持ち」を重要視してきました。その部分を重要視して良かったと思えた１年でした。気持ちで人とつながる、相手を思いやれる、チームのためにやるという前向きな方向に向かうことができました。これから自分自身も今の自分に満足せずにどんどん前に向かって進んでいきたいです。「チームの目標はベスト４になること」、「自分の目標はバスケットボールの公認審判になること」を次年度は取り組みたいです。言葉で語るのは簡単ですが、有言実行していきたいです。

５．最後に

私はこの１年で、新任教員であったとしても生徒や保護者からは教員として見られるという責任の重さを学ぶことができました。

この新任１年を通して、さまざまな面で支えていただいた向島中学校の先生方へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。また、新任１年目の指導教員である安村公男先生には、熱心なご指導ありがとうございました。そして、京都市教員になることに当たりたくさんのサポートをしていただいた善明宣夫教授、小谷正登教授に改めて感謝申し上げます。これからもっと日々努力し、お世話になった先生方から学んだことを自分に活かし、さらなる成長をしていきたいです。

今回、新任教員代表としてこのような文章を書く機会を与えていただき、教員１年目を一つひとつじっくりと振り返るとともに今後の目標を考え、自分自身を見つめ直す貴重な経験ができました。このような教職センターの方々にこの場をお借りして御礼を申し上げます。

（つじうち　しょうご・京都市立向島中学校教諭）